令和二年度

第六十六回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

後援・協賛

札幌市
札幌市議会
札幌市教育委員会
札幌市ＰＴＡ協議会
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部
一般財団法人　札幌市教育協会
㈱北海教育評論社
㈱平和堂
㈱図書館ネットワークサービス
㈱光陽社
キハラ（株）北海道営業所
光村図書出版（株）北海道支社
㈱清水書院　札幌営業所
教育出版㈱　北海道支社
東京書籍㈱
毎日新聞　北海道支社

目次

札幌市長賞　「車輪の下」を読んで　札幌聖心女子学院高等学校　一年　目良　茉莉香　1
札幌市議会議長賞　新しい自分へ　札幌市立西宮の沢小学校　六年　板倉　暖佳　2
札幌市教育長賞　人と人との繋がり　藤女子中学校　二年　長谷　涼那　3
札幌市学校図書館協議会会長賞　努力を続ける自分になる　札幌市立清田緑小学校　四年　東地　賢頼　4
札幌市学校図書館協議会会長賞　二日月が照らしたのは　北嶺中学校　一年　前田　海杜　5
札幌市学校図書館協議会会長賞　平和は怖い　札幌光星高等学校　二年　土岐　希美　6
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　わすれない名前　札幌市立厚別北小学校　二年　佐々木　正明　7
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　勇気と友達、この２つがあれば　藤女子中学校　二年　姉崎　優希　8
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　「私達」の罪　札幌光星高等学校　二年　加藤　萌香　9
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞　世界のはての少年がくれた希望　札幌啓成高等学校　二年　武石　琉花　10
光陽社賞　しっぽをなくしたイルカを読んで　藤女子中学校　一年　横窪　悠梨椰　11
キハラ賞　赤はな先生に会いたい！　札幌市立美香保小学校　五年　田中　柚妃　12
教育出版賞　あの日を忘れないために　藤女子中学校　三年　高輪　柚希　13
北海教育評論社賞　ポリぶくろ、一まい、ひろって　札幌市立伏見小学校　四年　前田　海音　14
図書館ネットワークサービス賞　生きること　藤女子中学校　一年　金一　裕　15
図書館ネットワークサービス賞　平和―大塚晟夫さんの手記を読んで―　札幌光星高等学校　一年　棚橋　歩実　16
光村図書出版賞　ぼくの５分　札幌市立小野幌小学校　一年　林　煌介　17

審　査

審査基準

○　内容や主題を的確に把握し、自分の考えたことや感じたことを素直に書いているか。

○　身近な問題と結びつけて考え、読み手の生活がにじみ出るように書いているか。

○　表現に工夫のあとが見られるか。（論旨・構想・表現・表記など）具体的な観点として、次の七点がある。

①　作品を十分に読み込んでいるか。

②　作品から受けた感動・発見・喜びなど読み手の心情が表現されているか。

③　読み手の独特の受け取りが学年相応に表現されているか。

④　読み手の日常生活や考え方が、どこかににじみ出ているか。

⑤　ほんとの付き合い、本との出会い、本を手にしたときの喜びなど、本に対する読み手の心がにじみ出ているか。

⑥　読書生活が日常の中に溶けこんで、自然な姿で読書しているか。

⑦　文体や語彙を工夫しているか。

○　本の選択に無理はないか。

○　応募規定に合っているか。

審査の方法

一　事務局で作品規定に従い整理。応募票は切り離し、作品に学年・対象図書別に通し番号を記す。学校名や氏名は審査段階で明らかにしない。

二　第一次審査により、第二次審査対象作品を選考。その選考にあたっては、一作品二名以上の審査員により評価し、競技の上決定する。

三　第二次審査では、佳作以上の街頭作品を小学校・中学校・高等学校別に審査。担当審査員の協議の上、決定する。

札幌市長賞

「車輪の下」を読んで

札幌聖心女子学院高等学校　一年　目良　茉莉香

「さもなくば、車輪の下敷きになる。」

物語にたった一度だけ登場する「車輪の下」という言葉。この台詞以降、主人公ハンスは自分を取り戻すすべての機会を失うことになった。この「車輪」は何を意味し、作者はなぜ「車輪の下」というタイトルにしたのだろうか。

ハンスは、村一番に優秀な少年だった。彼はエリート養成学校である神学校に合格するために、勉強に勤しんでいた。それは、頬が痩せこけてしまうほどの勉強であった。そして彼は神学校に二番の成績で合格をする。町中の人々から将来を嘱望されるものの、神学校の仲間であるハイルナーとの出会いをきっかけに、勉強一筋に生きてきた自らの生き方に疑問を感じるようになる。それは、規律に盲目的に従う優等生ばかりの中で、勉強にしか取り柄のなかったハンスが、規律に縛られない自由なハイルナーの言動に、魅了されてしまったのだと思う。

ハイルナーによって変わっていくハンスのことを周りは良く思わなかった。そんな中、大切な存在であったハイルナーは、問題を起こし退学してしまい、ハンスは仲間を失った。周囲の期待に応えるために自らの欲望を押し殺してきた果てに、彼の細い心身は疲弊していく。その一つの原因となるものが、「さもなくば、車輪の下敷きになる」という神学校の校長先生の言葉である。さらに教師や村人たちは、勉強という努力を怠ったものは落ちぶれて、車輪の下の人間になると、不幸で惨めであるとの価値観をハンスに植え付けてしまった。やがてハンスは、精神的に追い詰められて自主退学するが、周囲からは白い目で見られることになった。

私たちはそれぞれに、過酷な人生に直面することがあると思う。そんな時、心が解き放たれた瞬間を感じることができるのは、その気持ちの全てを受け止めてもらったときだと思う。周りの大人たちが、生き方を縛るのではなく、苦しいときに寄り添っていてくれたなら、ハンスは車輪の下敷きになってしまうことはなく、試練を乗り越えていくということができたかもしれない。「車輪」は、ハンスに限らず、人が生きていくうえで大切な試練で、「車輪の下」はその試練に敗れ、周囲から取り残される状態を表すのではないだろうか。

その後ハンスは機械工となり出直そうとするが、挫折感と昔の同級生への劣等感から自暴自棄となり、なれない酒に酔って川に落ち、溺死する。自ら命を絶ったのか、事故なのか、この物語の中では誰にも分からない。ハンスは自分自身を成り立たせているものを失ってしまったけれど、自分を縛り付ける父親との約束を自らの意志で破り、死の直前でハンスの心はやっと自由になったのだ。ハンスは自分らしく生きようとしただけなのに。あまりにも繊細過ぎたのではないだろうか。ハンスは車輪の下に落ちていきながらも、初めて自分の意志で友情を育み、初恋をし、仕事で感じる喜び、心の開放が許される酒の世界、それらの小さな幸福を見つけることができている。どこかでハンスを助けることはできなかったのか。

この物語を読み終えた時、なんとも言い難い複雑な感情で胸が熱くなり、しばらくその感情が離れることがなかった。そして、優秀な者を可愛がり、純粋な子供の心を奪って勉強させ、車輪の下敷きのような人生にならないような道を歩ませて、落ちこぼれれば冷たく接し、自らが重い車輪となってその人を潰していく大人や社会の制度に疑問を感じた。私は、これから将来を自身で担うようになったとき、己の名誉のために他を犠牲にする人間にはなりたくないと強く思った。そして私が大きな車輪の一部になり、誰かを下敷きにすることのないよう、大事なことは何かをよく考えて、謙虚にそれぞれの個性を認めることができる大人になりたいと思った。ハンスは叶えることが出来なかったけれど、自身の内面の声に従って、自分らしく生きることを大切にしたいと思う。もしも、自分の心が分からなくなった時には、一度足を止めて、「人生をかけて追うものは何であるべきなのか」と問いかけてみたい。

この物語から、百年以上の月日が流れている。時代を超えて、私たちは至る所でハンスのような傷つきやすい少年を垣間見ることがある。

ある時は、ニュースの中に、友達の中に、そして自分の中に。

「車輪の下」　ヘルマン・ヘッセ　著　偕成社

札幌市議会議長賞

新しい自分へ

西宮の沢小学校　六年　板倉　暖佳

「誰だって、人に頼って生きてるの。できないことは誰にだってある。」私は、この言葉に心を打たれた。

この物語は目の不自由な少年ルーチョと、コミュニケーションに悩む少女キアーラが、登山や二人で過ごす時間を通じて、自分に足りない何かに気付き、大人への一歩をふみ出していく物語だ。主人公のルーチョは周りからの目が気になり、素直になれない。自分に差しのべられる手を好きになれなくて、振りほどいてしまっている。一方キアーラは本当は明るい性格だが、その一面を出せずにいる。私はキアーラによく似ていると思う。家族や、親友の前では元気だけど、他の人の前では感情をあまり表に出せない。以前はそうではなかった。でも今は出したくても出せないのだ。だから、本当は嫌な事でも、頼まれたら断れない。そんな自分が嫌いだ。私は何度も引っ越しをくり返している。四年生の転校の時はそれまでと何かが違った。誰も声をかけてくれなくて、闇に放り込まれた気分になった。最初の三か月間はほとんど図書室ですごした。その時は胸が押しつぶされたように痛く、毎晩ベッドで泣いていた。私はそれまで友だちをつくるのは得意な方だと思っていただけに、なおさら辛かった。私もルーチョもキアーラも「何か」に恐れて、素直になれないのだと思う。そんなルーチョを変える、ある出来事が起こる。ルーチョとキアーラは二人で山を登る。そこは危険な道だった。手を貸そうとするが、ルーチョは断った。その結果ケガをしてしまう。それでもルーチョは、手を借りようとしない。ついにキアーラが怒った。キアーラは人に頼ることの大切さを教えた。今まで誰も変える事ができなかったルーチョの心を、キアーラがとかしたのだ。そしてルーチョはキアーラの手を借りた。キアーラは自分の気持ちを人に伝えることができるようになった。この事で二人はとても成長した。ルーチョはこの一年後、盲導犬の力を借りて高校生活を送っている。キアーラも新しい自分で楽しい生活を送っている。

「誰だって人に頼って生きてるの。できないことは誰にだってある。」全くその通りだと思う。私は、人に頼る事を恥ずかしいと思っていた。でも、人の手を借りて少しずつ努力を重ねていく事で、色々な事が出来るようになっていくのだと思った。今までは、母に指摘された時、どうしても間違いを認めたくなくて言い訳ばかりしていた。でも、自分の弱さを認めるという事は、負けでは無い。誰かに頼っても、自分は自分。自分が行きたい所に行けるなら、どんな手でも借りよう。なんでも、自分一人で乗り越えようとするのではなくて、人に手を借りることは自分の生活を豊かにしてくれる。私だって変われる。今からでも遅くない。思い切って、自分自身を表に出せば、世界は広がる。私もルーチョや、キアーラの様に新しい自分で新しい世界へ飛び出して行きたい。

「飛ぶための百歩」　ジュゼッペ・フェスタ・作
杉本　あり・訳　株式会社岩崎書店

札幌市教育長賞

人と人との繋がり

藤女子中学校　二年　長谷　涼那

「もしかしたら人は皆、ぶらんこ乗りなのかもしれない。」

本を読み終えた私の頭に、ふとこの考えがよぎった。一度手をにぎっても、いつかは離さなければならない。ずっとにぎっていることはできないのだ。人はみんな、出会い、そして別れる。そんな当たり前のことを深く考えさせてもらえる。

『ぶらんこ乗り』は「私」と「弟」の物語だ。「弟」は物語の中盤でかわいらしい声を失う。ぶらんこに乗っていたときに、喉に大きな雷が当たってしまったのだ。その後、「弟」は聞くにたえない声になってしまった。その時「弟」は元の声と「別れ」た。まるでぶらんこ乗りのように。さらにまた別の「別れ」もあった。それは両親だ。旅行に行くときに乗った飛行機が落ちたことが死因だ。あまりに突然で、大きすぎる「別れ」が二人を襲った。つないでいた手が離れてしまったのだ。

人はいつか必ず死ぬ。人だけに限ったことではない。動物も、植物だってそうだ。生きている限り、死は必ず訪れる。だから絶対に「別れ」ることがある。それは悲しく、とてもさびしいことだ。

私も「別れ」を経験したことがある。最初の「別れ」は幼稚園で飼っていたうさぎとの「別れ」だ。私が年長のときにうさぎはあの世へ行った。その時の私は、「もううさぎに会えない」ということを知り、泣いてしまった。その心の中には、後悔という感情はまだなかった。

他にも「別れ」はあった。私の祖父の兄の死だ。小学校中学年ごろのとき、その「別れ」は来た。彼の生前に会ったことは一度もなく、関わりのない人だった。だがそのことで一つ、気づかされたことがある。「もし大切な人が死んでしまったら、きっと今のままだと後悔するだろう。だから、生きている今、後悔することのない生き方をしよう。」ということだ。

筆者はこの本の題名を、なぜ『ぶらんこ乗り』にしたのだろうか。それは筆者がこの物語の中で一番伝えたいことだったからだと思う。「人は皆、ぶらんこ乗りと同じなのだ。」そういうことを、筆者は伝えたかったのだろう。そして、「その『別れ』が来るまで、悔いのないように生きてほしい。」という筆者の願いが隠されてあったのではないのか、とも思った。この物語を読んでいると、そういう筆者の思いや願いが伝わってくる。また、再び学ばせてもらえる。

祖父の兄の葬式が終わった後、しばらくは悔いのないように、と心がけていた。だが、一年ほど経つと、毎日のありがたさが分からなくなってきてしまった。そんなときに、この本に出会った。そして本を読み終えた後、再びその大切さに気づかされた。「人は『ぶらんこ乗り』なのだから、繋がっている時を大切にしよう。」と、そう思えた。同時に、「自分もいつか死ぬのなら、自分が生きたい生き方をしよう。」とも思えた。生きている時間は限られている。その時間の長さは人それぞれだ。だが、生きている限り、必ずやってくるものだ。その時間を有効に使いたい。その思いから、好きなように生きたいと思えた。そのことは、今も心に留めている。死ぬということへの恐怖心よりも、生きているということの楽しさを考えていようと考えた。人生は暗いことばかり考えていたらもったいないのだ。

そして、生きている今、この時も誰かが誰かと「別れ」を告げている。いつ自分がその誰かになるのかは分からない。だからこそ、今を楽しみたい。今は嫌いでも、何かがきっかけで好きになるかも知れない。今は赤の他人でも、親友になるかも知れない。もちろんその逆もある。好きな人のことを嫌いになったり、親友とケンカして他人に戻ったり。でももし、また繋がれるのなら、私はその手を再び繋ぎたい。いつか離ればなれになる時まで、その手を繋いでいたい。そういう風に思えるようになった。

最後に、私が伝えたかったことは、「人は『ぶらんこ乗り』のようにずっと手を繋いでいることはできない。だからこそ、この時を大切にしたいと思う。そして、いつか離れると分かっていても、その日まで手を繋いでいたい。」ということだ。普段は気づかない、生きることの素晴らしさを、この本を通じて気づかされた。そして、これからもそのことを大切に、生きていられる時間を精一杯使って、皆と手を繋いでいこうと思う。本の中の家族のように、死んでしまったらもう会えない。死んだ後に、その大切さにやっと気づく。そんな後悔はしたくない。だから、このような生き方をしていきたいと思う。また、皆にもこのような生き方をしてほしい。それが私の願いだ。

「ぶらんこ乗り」　いしいしんじ・著　理論社

札幌市学校図書館協議会会長賞

努力を続ける自分になる

清田緑小学校　四年　東地　賢頼

ぼくは今日も、グローブにオイルをぬる。汚れたところをてっ底的にふいて、ボールをキャッチするイメージをしながら、それを受けるポケットをねん入りに手入れする。

ぼくは本屋さんで、世界で活やくしたイチロー選手の少年時代について書かれたこの本を見つけ、読まずにはいられなかった。

ぼくは、小学校に入学する前から野球チームに入りたかったが、両親の仕事が忙しいという理由で、なかなかチームには入れてもらえなかった。それでも、自分でバッティングセンターに行ったり、野球をやっているいとこに、キャッチボールの相手をしてもらったりして練習をしていた。

三年生の秋、自分でチームのれんらく先を聞いてきて、体けんの申し込みをした。そうしたら、「そこまでやりたいのなら、お父さんとお母さんもがんばってみようかな。」と言ってくれて、ぼくはついにチームに入団することができた。ボールをバットのしんでとらえ、外野をぬける大きな当たりを出したときの気持ちよさったらない。おこづかいをためて、新しいバットを買った時には、うれしくていっしょにねた。

イチロー選手は少年時代から、ピッチングもバッティングも、なみ外れた才能があったことがわかった。その理由を知りたくて、ぼくは本を読み進めた。

中でもぼくの心にひびいたのは、「勝っただけでガッツポーズをするようなことをしてはいけない。」という言葉だ。ぼくは、打席でいい当たりを出したら、「しつこい。」と家族に言われるくらいに何度もとくいげに話して聞かせる。反対に、試合でエラーをしてしまった時には、わすれてしまいたくなる。

さらにひどいことに、ぼくは、思い通りのプレーができなかった時に、同級生のチームメイトや入ったばかりの下級生のせいにして、おこり、ふてくされたたい度をとってしまう。なんと、いじけてだっ走したことまである。今考えると、とてもはずかしい。自分のしっぱいをみとめ、次に生かせる選手になりたい。

もう一つ、イチロー選手は、いつも身の回りをきれいにし、道具を大切にして、手入れをかかさなかった。これは、いつもぼくがかんとくに言われていることと同じだった。道具や身の回りを見れば、将来いい選手になるかどうかが見ている人には分かってしまう。

この本が教えてくれたことは、野球の上達の仕方だけではなく、夢をもち続けて努力することの大切さだ。ぼくのお母さんは、「努力を続けることができるのも才能だよ。」と言っていた。その意味が少し分かった気がする。

ぼくは、口ばっかりで、やろうと決めたことが全然続かない。でも、これからは、その場かぎりではなく、けい続して努力できる人間になりたい。そう思えたから、この本を読んでよかった。

よし、まずは明日の試合で、だれよりもベンチをきれいにするんだ。

「大リーガーイチローの少年時代」　鈴木宣之・著　二見書房

札幌市学校図書館協議会会長賞

二日月が照らしたのは

北嶺中学校　一年　前田　海杜

「前田の妹も障害でしょ。兄妹でキモッ」

その言葉を聞いて胸が波打った。発作を抑える薬の副作用で頭がぼんやりしても握力の弱くなった手に鉛筆を握って勉強する妹。

「いつ通えなくなるかわからないから。」と体調が今ひとつでも登校する妹。僕が落ち込んでいるとゴリラの真似をして笑わせてくる妹。入院中機械に囲まれて過ごす妹。激しい頭痛の発作に苦しむ姿を前に、僕は妹はこのまま死んでしまうかもしれないという恐怖感と無力感に苛まれる。お前達に何が分かる。と僕は拳を握った。同時に自問自答する。僕だって何もわかってない。妹の苦しさも、僕自身が妹の病気や自身の特性をどう受け止めるつもりなのかも。振り上げるつもりの拳は力を失い、だらしなく垂れた。

苛立つ気持ちで偶然妹の本棚にあったこの本を読んだ僕はその世界に引き込まれた。待望の妹の誕生に喜ぶ杏を待ち受けていたのは、予想と全く違う妹との日々だった。障害を抱え、生命の危機を乗り越えながらゆっくりと成長する妹、芽生。両親の関心は自ずと芽生に向く毎日の中で、杏は芽生の存在を受け入れることに葛藤を覚える。かけがえのない妹であることは紛れもない事実なのだが、杏は病気の妹の存在を知られるのを恥じ、恐れていた。障害、病気がもたらす漠然とした不安、恐怖心。周囲の軽蔑や憐れみの言葉に怒り傷つく心。そして妹への嫉妬、両親への不満。姉として我慢を強いられる生活。杏の抱える葛藤は丸ごと僕の抱えるそれと同じだった。

病気や障害をもつ子供の兄弟姉妹のことをきょうだい児と呼ぶ。きょうだい児は自己評価が低くなりがちと言われている。物心ついた頃からきょうだいが必要なケアを受けるために我慢を強いられたり、子供でありながら権利擁護者として振る舞うことを期待され、心をすり減らすのだ。僕の妹は幼少期から定期的な通院や入院が必要で、僕の生活も妹の治療や体調で予定変更したりすることがある。その度に妹はいつも僕に謝る。自分のせいで迷惑かけて、我慢させてごめんねと。僕はいつも「別に。仕方ないしょ。」と返す。そもそも僕は妹にとってヒーローのような兄ではない。児童精神科の先生は家庭や学校でトラブルを起こす僕に「無意識に家族の中にある葛藤や緊張から目をそらせようとしているのではないか。」と話された。また、集団では注目されたくて過剰におどけた態度や仕草でアピールしてしまう。何にしても僕の心の中の漠然とした寂しさや辛さを言葉に出来なかった。僕も妹も、お互いが葛藤を抱えて生きることは明らかだ。

「障害」「キモッ」その言葉は僕の心に刺さったままだった。母にこの出来事を伝えた。母は無言だった。僕は「何とか言ってよ。ありがとうとかがんばったねとか無理しなくていいとか何か言ってよ」と母に言葉を投げつけた。僕は共感が欲しかった。葛藤やずるさや甘え、様々な感情を抱く自分をありのまま受け止めることを許されたかったのだ。家族が自然に尊重し合えることは尊い。しかし、病気や障害がある事で押しつぶされそうになる気持ちを吐露することが許されないなら、自分という存在がどんどん透明になってしまう。それが僕らきょうだい児の抱える生きづらさの本質だ。自分は自分。妹は妹。不自由と感じる境遇を嘆くのではなく、杏にとって家族や真由や藤枝君という友達の存在があったように、自分らしく生きている姿を見守ってくれる人は必ずいることに僕らは気づくべきなのだ。共感してくれる人が一人でもいたら、僕らは自分を肯定して一歩踏み出せる。妹は冒頭の出来事に「ごめんね」とやっぱり泣いた。僕は妹に謝罪が口癖みたいな生き方をさせないと決めた。悪意をはらんだ言葉だけに耳をすませて生きていくなんて勿体ない。現実を受け入れたら、前を向く。そういう姿を妹に見せようと思った。また例えば誰かに揶揄される出来事があったら「そうなんだよ。兄妹そろってやんなるわ」と笑ってみせよう。そして「でもさ、俺も妹も一生懸命生きてるんだ」と忘れずに付け加えよう。僕が知っている妹の姿を、それを知らない誰かに伝えるのが僕の使命だ。難しく考えすぎたり、拳を握る前に僕ら兄妹の存在を理解してくれる人がきっといると信じよう。妹の生き様は誰かの心に必ず響く。泣き顔の妹に僕は心から、「ごめんとかいいから。本当あいつらわかってないよな。」と、笑って言えた。障害は迷惑と言った春奈ちゃんに「病気でなかなか大きくなれないんだ。」と言えた杏もきっとその時ぼくと同じ気持ちで笑えたと思う。

杏は満ちて欠ける月が人と似ていると言った。二日月はまだ明るい空に浮かぶ繊維のように細い月だ。これからも僕ら兄妹は様々な出来事に遭遇するであろう。そこで憤る僕も受容し赦そう思う僕も全て僕だ。二日月の微かな光は僕を静かに照らし、希望が確かにそこにあると気づかせてくれた。

「二日月」　いとうみく・著　そうえん社

札幌市学校図書館協議会会長賞

平和は怖い

札幌光星高等学校　二年　土岐　希美

ナパージュは愚鈍な国だな。三戒だけで平和が保たれるはずがないじゃないか。なんで気付かないんだ。と最初思った。解説を読んでみると、どうやらナパージュは日本を風刺しているらしい。何度も読んでいると、台詞や場面が日本における何を表しているのかが分かってきて、歴史と繋げることができるのでとても面白いし、物語として書かれているから読みやすかった。そして、自分自身も十分に愚鈍であり、平和ボケしていることに気付かされた。憲法がある。日本は平和主義。だから戦争が起きない。幼い頃の私は本当にそう思っていた。日本が他国に守られていることもよく知らず、この本に出会うまで深く考えてこなかった。戦争を起こす人の理解ができなかったし、人の命を賭けてまでする事じゃないと思っていた。それが１８０度ひっくり返され、なんで気付かなかったんだ。世界は信じる心だけでは変えられない。当たり前のようで理解できていなかった。このまま大人になっていたら次世代に悪影響を与えることになってしまったのではないか。と自分に怯えた。

「武器を持たなければ争いは起こらなくなる。三戒を守ればいい。世界は永久に平和になるだろう。ナパージュのカエルは他のカエルたちの騒動には関わらないのだ。」

三戒が国を守っているという教育を受けているから、気付けない。小さい頃に教えられることは全てが正しく思えて、頭にフィルターなんて物は無いから全ての情報を鵜呑みにしてしまう。それらの情報を基盤にして成長していくわけだから、国をまたげば理解できない考えを持つ人ももちろんいるし、争いも当然のように起こる。命を守るために命を賭けるのが戦争なのかもしれない。と考えるようになった。自国の文化を知ることはとても重要なことだが、それと同時に他国の文化を入れることや情報を取捨選択することの大切さを教育に早くから取り入れることが必要だと思ったし、物事の行末を考える時にはバランス良く想像することが大事になってくることを知った。平和な国にずっといると平和が当たり前になり、なぜ平和が保たれているのかが分からなくなるため世代を重ねるにつれて薄れていく。

「この国は三戒については詳しいのに、昔のことになると、知らないことばかりだね。」

歴史を学び、世界の残酷さを知る事でどれだけ平和ボケしているのかが分かる。以前より新聞を読むようになった。そうする事で、世界の人々が持つ意識や価値観が分かるようになるからだ。また、本を沢山読むことは知識を増やし、視野を広げ、経験値を増やしたりとあらゆる可能性を広げてくれることを改めて実感した。

「崖の下に恐ろしいウシガエルが大量にいるのにそんなことはまるで別世界のよう。」

現代の日本も、国外の政治に関心のある若い人が少ないように感じる。国内の政治にもまるで興味がない。中国では、政治についての関心が高く、若い時から友人同士で話すことがある。と聞いたことがある。しかし、日本は平和で技術も発達していて福祉も充実している素晴らしい国だと誇る割に、自国や他国への考えを持っている人が少ないと思う。ましてや友人との話題に政治があがるというのは聞いたことがない。何が起こるか分からないのだから、もっと政治に対して積極的になるべきだ。

「善良なカエルに見えるが、実は好戦的で残虐なカエルと言われている。」

日本人も、平和を愛し、戦いなど好まない人種のように見えるが、第二次世界大戦でドイツやイタリアが降伏した。中日本だけは降伏せずに、勝ち目のないアメリカと戦う常軌を逸した好戦性を持っていることに気付いた。これを自覚するだけで随分と世界の見え方が変わるものだ。

「全て自分たちだけが得をする約束事というのはこの世に存在しません。それは他力本願の無責任主義、夢見る平和主義を持ち合わせた国の行末を知り、最初は国全体の問題だったのが最後は一人一人の問題になり返ってくるのだということを改めて痛感した。私たちがこうして平和ボケしている間に、死に対する恐怖を日々抱えながら一日を精一杯生きようとしている人が増えていく。私は以前カンボジアに行った際に、自分より幼い子が裸足でボロボロの服を着ながら物売りをしている姿に心を痛めたことがある。その経験を経て、貧困・戦争問題や歴史に興味を持ち世界に貢献したいと考えるようになった。そのために努力することは大変だが、向上心を保ち、世界への関心を高めていきながら今の自分にできることを着実にこなしていくつもりだ。この本はこれからの人生を変えてくれるだろう。将来について様々な事を考える若い内に出会えて本当に良かった。心から思う。

「カエルの楽園」　百田　尚樹・著　新潮社

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

わすれない名前

厚別北小学校　二年　佐々木　正明

ごんすけがしんだ時、妹を思い出してとてもかなしくなりました。ぼくが五才になった日、おなかの中でびょう気になって妹は亡くなりました。生まれてくることができませんでした。妹がしんでしまったことで、しぬのがすごくすごくこわくなりました。だから、ぼくは、いがらしくんみたいに、しぬのを見たいとは思いません。

妹がしぬまで、しんだらお空にとんで行くんだと思っていたけれど、きえちゃうんだと分かりました。おそうしきの時、妹は小さなはこに入っていました。やいたら、ほね一本だけがのこりました。いっぱい入れたお花も、お姉ちゃんの手紙も、妹も、きえちゃいました。

おそうしきの後、みんなでおべんとうをたべました。どれがおいしいとかしょっぱいとか、妹にかんけいない話をしてわらったら、元気になりました。気もちがふっ活しました。ぼくのこちょこちょマンは、一しょにごはんをたべることです。なので、もし、かぞくや友だちがしょんぼりしていたら、いっしょにおやつをたべて、おいしいとか、へんなたべ方とか、どうでもいい話でわらわせたいです。

お母さんが「しんでも新しいいのちに生まれてくる」と教えてくれました。ぼくは新しく生まれても、今の思い出をリセットしちゃうのはいやです。ぼくにかわいい妹がいたことや、妹の名前。ぼくがわすれるのも、みんなにわすれられるのも、なみだが出ます。

でも、にしやんが、ごんすけはしんでもしないと言っていて、それは「心の中で生きてる」ってことだと気づきました。ぼくが妹をわすれなかったら、妹はしなない。妹は、ぼくとお父さんの「明」の字で「あかり」といいます。だから、自分の名前を見た時に、ぼくはいつも妹を思い出します。時々、今年で三才だねとか妹のことを話します。

明ちゃん、わすれないよ。いつか、新しいいのちになった明ちゃんにあえますように。

「山のちょうじょうの木のてっぺん」　最上一平・著　新日本出版社

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

勇気と友達、この二つがあれば

藤女子中学校　二年　姉崎　優希

グレイソンがかたい自分のからを割り、外の世界に飛び出した時、私はグレイソンは本当にすごいと思うと共に、自分は今のままで本当に良いのだろうかと思った。

私はこの本を読み、小学校の先生が教えてくれた「一匹目のペンギンになる」という言葉を思い出した。そしてまさに、グレイソンは彼のクラスの「一匹目のペンギン」だと思った。「一匹目のペンギンになる」というのは、勇気を持ち、一番に一歩ふみ出すということだ。南極に住むペンギンは群れで生活している。えさをとりに行く時ももちろん群れだ。しかしえさをとりに氷の上から海に飛び込むという事は、ペンギンにとっては怖い事なのだ。なぜなら海の中にはえさだけでなく、敵もいるからである。でもそこに、勇気を持った一匹のペンギンがピョンと海に飛び込むと、他のペンギン達もどんどん飛び込んでくる。

私はペンギンと同じように、グレイソンが一匹目となり本当の自分を表現したことで、きっとクラスメート達も二匹目、三匹目となり自分を表現できるようになったと思う。いつもとりあえず他の人の意見に合わせていた人や、本当の自分をかくしていた人など、グレイソンの行動に背中を押され自分のからを飛び出せたら、それから後の日々は今までと大きく変わる気がする。飛び出した先はからの中のようにきゅうくつではない、とても広い世界が広がっている。

しかし私は、からの外にすぐ明るい世界が待っているとはかぎらないと思う。自分を変だと言う人もいると思うし、からの中にはなかった新しい困難があるかもしれない。でもそこには、どこかに仲間がいるし応援してくれる人もいるから、からの中よりも外の方が何倍も楽しいと思う。私はこの本を読み、気付いたら熱い気持ちになっていた。

そして、私は自分とグレイソンを比べてみると、自分には中途半端なところで諦める時があり、だから一匹目のペンギンになれないのではないかと思った。授業で先生に質問された時、発表しようと思っていても周りを見て「みんなも言っていないからいいか」とみんなに流されてしまったり、部活の振り返りで誰かが発表しなくてはいけない時に、「誰かが言ってくれるよね」「大変そうだから」と考え、挑戦せずにもやもやした気分になった事が中学校に入ってからいくつかある。それに比べグレイソンは、演劇でペルセポネという女神の役に挑戦したり、男の子の服を着るのをやめ、女の子の服を着ることを決断したりした。これには本当に強い心がいると思う。グレイソンがこの決断をした時に言った言葉――「こわい、けど負けない」このグレイソンの強い決意が表れた言葉は私の心に強く残った。女の子として生きるという決断は、簡単なことではないはずだ。「もしかしたら笑われるかもしれない。後で後悔するかも。いじめられるかも。これは本当に正しいのかな。」このように怖いという気持ちがグレイソンの心にも広がっただろう。そんなグレイソンが自分に負けなかった理由、それはペイジという友達の存在だ。彼女は、グレイソンが女の子になりたいと思っていたり、女の子の服を着ていてもそれを受け止め普通に接してくれる。グレイソンは、ありのままの自分を受け入れ、見守ってくれる友達がいたから一匹目のペンギンとなって新しい世界に飛び込めたのだと思う。私はこの時、勇気、そして本当に自分を思ってくれて、自分も相手を思っているという本当の友達がいれば、どんな怖い事にも、つらい事にも負けることはないと思った。

日本にもグレイソンのような人は多くいる。そして、それは自分の個性だと考え活躍している人もいる。最近、女子の制服の選択を自由にしている学校もあるそうだ。男子がスカートをはくということの実現にはまだ時間がかかると思うけれど……。このようなことへの理解が進む今の時代、ペイジのようにどんな人にも同じくらい大きな優しさを与えられる人が増えていって欲しいと思う。そして、私自身も誰かにとってのペイジのような存在になりたいと思う。

この本を読んだことで私は、グレイソンのような人々について知り、考えることができた。そして、中途半端で良いという自分の考えを改めるきっかけにもなった。「怖いから。自分には無理だ。誰かがやってくれる。別にいいや。」そうやってどんどんマイナス方向に進んでいく。怖さや恐れから、世界をせまくしていく。そんな自分はいやだと強く思った。少しでもやりたいと思った事を中途半端なところで諦めるのはもうやめよう。どうせなら何でも全力でやってみよう。グレイソンは、これまでの私の心に大改革を起こしてくれた心の中の友達だ。

「ぼくがスカートをはく日」　エイミ・ポロンスキー著　西田佳子訳　学研プラス

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

「私達」の罪

札幌光星高等学校　二年　加藤　萌香

植物も動物も、進化することで生き延びてきた。次のような例が分かりやすいだろう。

チーターには速い足がある。ウサギには長い耳がある。鳥には空を飛べる羽がある。これらは、彼らにとって最大の特徴であり、一早く獲物を捕まえるために、あるいは一早く天敵から身を隠すために、長い年月をかけて手に入れた武器である。我々人間には知性が当てはまる。太古より、野生の大きな力に対し、私たちは知性で戦ってきた。

しかし、我々の武器はあまりに強すぎるのかもしれない。いつの日か私たちは誤った使い方を始めた。自分たちが生きるためと言うにはあまりに多すぎる数を苦しめ、ぞんざいに扱い、挙句には邪魔だからと殺した。身近な物では動物園だろうか。動物たちが世界各国の動物園の間で輸出入されているという話を聞くと正直不憫な気がするが、種の存続を守るという目的もあるので、一概にダメとは言えない。だが、過去には動物たちがただ人間の娯楽のために虐げられた事実も確かにあるのだ。この本は、そのような歴史を基にした寓話集なのである。

舞台はイギリスだが、現在イギリスには野生の熊というものが存在しないと聞いた。原因はやはり娯楽や食料の対象として乱獲されてしまった故のようだ。食料にするため、というのは北海道の先住民族とも共通しているし、理解できるが、娯楽のためとはなぜなのか。私には、人間が他の動物を見下しているからだ、と以外思えない。

実際に、過去のイギリスでどのように熊が苦しめられてきたのかを具体的に述べるのは控えるが、中々に惨いものも多い。人間の知性によって熊からの反抗を封じ、その上で一方的に危害を加え続けるのだ。何故命ある者にそんなことができるのか。それは熊に人間ほどの知性がないのを、人間が劣っていることと捉えているからに他ならないだろう。我々にとってただの武器でしかない知性を、他の動物を虐げる理由と手段として使うのは、生物としてとても愚かなことだと思う。私はずっと、なぜ人間が自分達と周りの動物を同等の命として扱えないのかと考えてきた。そして最終的に、そうなるにはしばらくかかるだろうという結論に至ったのである。

人間は、同じ人間すら見下している。差別と言われるものだ。しかも、肌の色や住む場所、職業や出身など、本当に知性があるのかと問いたくなるような理由である。幸い私の周りにはそのように人を差別する人間はいないのだが、地域によっては差別が当然の文化として根付いている場所もある。この事実は本当に恥ずかしいことだ。

しかし私も、このように「差別している人間」を差別している。私の周りの人も、きっと私と同じような差別をするだろう。本当に差別をしない人は、そもそも差別に興味がないか、差別そのものを知らないのである。だが、そんな人が世界にどれだけいるというのだろうか。きっと純真無垢な子どもぐらいなものである。もしかしたら差別というのは、我々の血に刻まれた人間の性なのかもしれない。同じ人間を見下すことがなくならない限り、動物の命を軽視することもある意味当然と言えるだろう。

戦争や紛争、というのも命を同等に見ないということの良い例である。権力のある人間が無理にでも命じて一般国民に命をかけさせている。上の人間に命の重さを考えることがあるなら、そんな方法はとらないだろう。自分は安全な所で利益のために指示を飛ばすなんて、これぞ知性の無駄遣いであろう。動物が闘うのは仲間や家族、巣など本当に大切な物を守るためである。さらに、闘うのは大体群れの頭自身だ。本当に「頭が良い」のはどちらだろうか。

一度でいいからこの本を読んでみてほしいと思う。私のように人間のずるさや命の不平等を感じるかは分からない。が、読んだ人全員の心に、何か黒い塊を残していくことだろう。人によっては途中で手を止めてしまうかもしれない。だが、少なからず自分の価値観に変化が起きると思う。

実際、この本を読んで、私の価値観に「人間も動物の一種でしかない」という考えが加わった。どうにも私には、今も昔も人間が自身を他の動物よりも高貴で上品な生き物だと思っている気がしてならない。そう思っていなければ、環境破壊、動物虐待、そんなものは存在しないはずである。私が思うには、我々には「他の動物と共存して生きる」という考え方がないのだ。人間にとって益か害か、それだけで他の種を殺したり守ったり、というのは身勝手ではないだろうか。

とは言え私はこの人間が生きやすい世界で生活しているし、今すぐに野生に人類を戻そうとまでは思っていない。ただ、今まで我々が他の種に行ってきた罪深い物事への償いの在り方は、考えるべきだ。

「こうしてイギリスから熊がいなくなりました」
ミック・ジャクソン・著　東京創元社

北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞

世界のはての少年がくれた希望

札幌啓成高等学校　二年　武石　琉花

一七二七年に実際に起きたある事件をもとに書かれた小説『世界の果ての少年』。この本は、いわゆる「コロナ禍」に置かれている二〇二〇年の私に希望をもたらした。

イギリス諸島の端に位置するヒルタ島。ここでは毎年夏になると、少年たちが離れ小島の「戦士の岩」に赴いて海鳥を狩る。島の住民たちは、その海鳥を本島で売って生計を立てている。今年は九人の子供と三人の大人が海に出た。主人公・クイリアムもその一員であった。滞在期間は三週間の予定だったが、四週目を過ぎても迎えの船は来ない。クイリアムは、ヒルタ島で出会った想い人の教員補佐・マーディナと再会するという希望を胸に、自然や人間の恐ろしさに立ち向かう。

読み進めるたび、児童文学を思わせる装画からは想像できない厳しい生の現実が叩きつけられる。しかし、クイリアムはリーダーの素質を発揮し、自分のことで精一杯な大人に代わって子供らの指揮を執る。例えば、世界が終わった景色（幻覚である）を見たという話で大騒ぎになった子供たちを、クイリアムは作り話を披露して正気へと引き戻す。また、子供一人一人に「時の番人」「針の番人」などの仕事を与えて嫌なことから意識を背けさせた。このように、クイリアムは他人をよく観察し、状況打破のための最善策を見つけ出す。彼が作り話をしたり番人の役目を与えたりしたのは、相手がものを信じやすい幼い子供だったからだろう。説得する相手が大人なら、彼は違う手を使った。ある大人が自殺を試みた時、彼は必要以上に語らなかった。しかし、自殺を踏み留まらせることに成功した。物事を見極める力で、彼は生還したのだ。

さて、クイリアムが持つこれらの力だが、これこそが私にもたらされた希望の一つである。夏に飛来する海鳥しか食べるものがない、切り立った岩の上で冬を越す。このような未曾有の事態で他人から信頼を得るのは、大人でもなかなか難しいだろう。しかしクイリアムはそれをやってのけた。現代で求められる力をたくさん持ったクイリアムは、私にとってひとつの手本となったのだ。

あと二年もしないうちに社会から成人と見なされ、「もう大人だから」と言われるようになる。私はそう感じながら、何を知ろうともしていない怠慢なもう一人の自分を嘆いていた。遠く目線を飛ばせば、自らで道を切り拓く十代がたくさんいる。でもそれはあくまで「遠く」の人であって、自分とは違うと思っていた。しかしクイリアムは次元の壁こそあれど「遠い人」ではなかった。死の恐怖と隣合わせになりながら皆を先導する姿は、私に憧れすら抱かせた。このまま生ぬるく守られて突然荒波の中に放り出されるより、自分の足で踏みだすほうがいい。スタートが早いに越したことはない。そう思った。クイリアムは作中で皆に希望を与えていたが、私もまた、未来へ向かう力と希望を彼から貰ったのだった。

これとは別に、この本が教えてくれたことがもう一つある。それは、「明けない夜はない」ということだ。

冬を越し春を迎えたクイリアム達に、ようやく迎えの船が来た。しかし、帰路にて知らされた島の現状は「天然痘の流行により島民のほとんどが死んだ」というあまりにも惨いものだった。厳しい無人島生活が終わり一瞬差し込んだ光は、あっけなく消えた。たった一年にも満たない間に、幾度となく希望と絶望を繰り返した。彼は悲しみに暮れた。しかし、希望はまたやってきた。彼はマーディナと再会したのだ。どれだけ辛い夜でも必ず明ける。この本はそれを教えてくれた。

コロナ禍という長い夜が続いている現在。失った日常や来るはずだった未来に思いを巡らせ、人々の怒りや悲しみに耳を傾けては頭を悩ませた。社会のことから自身のことまで色々考えても、結論はなに一つ出なかった。だからこそ、様々なヒントを与えてくれたこの本に運命を感じずにはいられないのだ。

私は、「明けない夜はない」ことを教え、未来への道を照らす光となってくれたこの本に感謝している。そして、この長い夜が早く開けるように願っている。『世界のはての少年』を胸に抱えた私は、次の日の出までに新しい自分になれるよう動き出すのだ。

「世界のはての少年」　ジェラルディン・マコックラン・著　東京創元社

光陽社賞

しっぽをなくしたイルカを呼んで

藤女子中学校　一年　横窪　悠梨椰

私が、この本を手にしたのは、小学校高学年の時だ。私の心と頭に何か形には出来ない衝撃が走ったのだ。それは、イルカのフジという子の壊死した尾びれを「電気メスで切り落とされた」という冒頭から出てくる節からである。イルカは人間並みに頭が良い。そのイルカが麻酔が効いているのかわからない状態で、尾びれを切断される。しかも、尾びれが無くなった状態から、水族館の演技ショーで泳ぎ回ることができるようになるまで、多数の人間が関わり元気になるのだ。私は、フジが元の生活に回復するまでの過程を読み進めていくうちに、学ぶことが多々あったのだが、強く心に残ったことは「諦めない力」、「人と人との助け合い」だ。

私は、母のお腹にいる時から、およそ四百人の収容人数の会場で、母の胎内で共にピアノ演奏をし、その頃からピアノ演奏に関わり今現在まで五体満足で猛練習をしている。しかし「もう、いいや！」というマイナスな気持ちがわいてくることがある。練習しても成果に繋がらない時にだ。しかし、フジは懸命に努力を続けた。フジは元来「肝っ玉母さん」である。頑張り屋さんの性格だ。しかし、体の一部を切断されて、イルカにとって泳ぐ為の要である、尾びれを無くしたわけだから、「頑張る」なんて普通なら出来ないはずだ。そんな身体なのに、餌を少しずつ食べることから始まり、元気な仲間のイルカ達とリハビリをしていく。私は健康な体を持ちながら、諦めようとする気持ちがわいてくるのに、フジは後ろを振り向かない。フジの上昇思考、前向きな姿と比較すると、私自身の時折わき上がるマイナス思考には「反省」しかない。

フジは検査で白血球の値が通常の二倍だった。私も風邪をこじらせると内科で白血球の値を調べてもらう。医師も母も顔には出さないが、皆不安でいっぱいなのだと後日母が教えてくれた。私自身ももちろん不安な気持ちになる。フジはイルカなので数値の意味が理解できないはずだ。しかし、自分に何か悪いことが起こっていることを感じ、不安な気持ちになったのは間違いない。尾びれの切断は壊死を阻止する為。だが、どんな理由であってもフジから見たら、切断に踏み切った全ての者が、悪者に見えていたのではないだろうか。実際に、頭の良いフジは助けてくれている職員に対して悪態をついたりしていたようだ。だが、フジの行動は尊敬できる。何故なら、切断された翌日から泳げるように前向きに努力をするからだ。このことは私自身のピアノを上達させる過程に繋がる。明日は何が起こるかわからない。しかし、両親と神様から頂いた身体を大切にし、何事にも諦めない力を持ち、練習に打ち込もうと決心した。

その後、美ら海水族館の方とブリジストンの社員達は協力してフジの切断した尾びれを人工尾びれに替えて、製作する作業に入る。人間でいう義手、義足だ。その、人工尾びれを、「ゴム製品ならどうだろう？」という案からタイヤの会社であるブリジストンに依頼するのだが、ブリジストンの社員も尾びれを作った事が無い。フジは生き物、しかも泳ぐ為には、どんな型や厚さが泳ぎやすいのかを一から調べていかなくてはならない。このことが、私のピアノを指導してくださる母や先生の姿と再びリンクするのだ。私の場合、指が早く動くだけで、腕の使い方、音色の出し方が不十分だ。また私には理解し表現する力が足りない。その点を、先生は、とても細かく丁寧に指導してくださる。正に、教える立場の気持ちになれば、根気がいる時間と作業そのものだと思われる。その想いには、「感謝」の一言につきる。

美ら海水族館がある沖縄とブリジストンの社員がいる東京を何度も往復して研究を重ねているフジの尾びれを作っている方々の姿と私の母が私のレッスンの為に先生のお宅や会場、楽器店などに送迎往復してくれる姿とも繋がる。フジの尾びれは何十人もの人間の知恵と努力で作り上げている。私にも、一つの演奏を作り上げていくには先生と家族の支えが必要なのだ。最近ようやく母と先生から、「音色が良くなった」と言われるようになってきた。ここまで来るのには私一人の努力ではない。とこの作品を読み進めるにつれ痛感する。自分だけでいろいろなことが出来ているのではなく、親や先生の熱い想いのおかげで今の自分があるということに改めて気がついたのだ。私がこれから大人に近づいていくにつれて、体も心も成長する。その時、フジが助けてくれた皆の前でジャンプ出来たように、私が出来る精一杯な演奏をしたい。私の母はいつも私に言う。「子供の幸せが母の最高の幸せだ」と。私が将来ピアノの先生になれた時は相手のためにひたすら働ける人になろうと思うのだ。

「しっぽをなくしたイルカ」　岩貞　るみこ・著　講談社

キハラ賞

赤はな先生に会いたい！

美香保小学校　五年　田中　柚妃

「赤はな先生に会いたい！」を読んだら、私と同じような人が出てきた。

私は、生まれつき、筋肉が弱い。私は重い荷物も持てないし、みんなと同じスピードでは走れない。私は、手の力が弱い。

だから、図工の時間に、彫刻刀やのこぎりをぎこぎこするのも押さえる手が、グニャグニャしてしまうし、刃物はゆっくりになって曲がってしまうから、とても心配。

私は、学校が終って、一日頑張ったら、すごくつかれて、四才の妹よりも、早くに寝てしまう。

でも、私より、もっと大変な人がいた。本の中に出てきた六年生の女の子は、赤ちゃんの時から、何度も手術をくり返し、長く入院して、何回も手術しても完治しなくて、「私不良品だから…。」と、言っていた、私は入院してないけど、この子は再入院をくり返してかわいそう。

赤はな先生は、「不良品な子どもはいません。」と言って、それを、伝えたいと思って、詩を書く授業をした。

「あなたにとって『生きる』とは、何ですか？あなたにとっての『生きる』を集めましょう。」と言って、たくさん集めたら、その女の子は、「先生、こわいと思ってもいいんだよね。」「だれかと会って、どきどきワクワクできたら、それが私の生きること。」と言って自分の素直な気持ちを、詩に表した。

私も、赤ちゃんの時から今までに三か所の病院に通って、赤はな先生のように私のことを見守ってくれる先生方も十一人もいる。私は、筋肉が少なくて太りやすい。さらに、とうにょう病など、病気になりやすい体質だ。

だから、学校の給食で、太らないように、主食を半分にしてがまんしたり、おやつやごはんも好きなだけ本当は食べたいけど、少しだけにして、食べ過ぎないようにしている。

私の病院の先生方は、訓練や食事をがまんしていることや、頑張っていることを一緒に喜んでくれる。「えらいね。」と、ほめてくれることが、私の頑張れる力になっている。

赤はな先生は、子どもたちに元気をとどけたいから、笑ってほしいから赤はなをつけている。院内学級の子どもたちは、学校にも行けないし、お家にも居られなくて、とてもかわいそう。赤はな先生は、一人ひとりの子どもに合わせて、学習の量や時間も調整してくれる。赤はな先生は、やさしくて良い先生だから、ずっと居てあげて欲しいと思った。

私は、学校が楽しい。毎日、学校に行きたい。私のクラスやとなりのクラスには、やさしい友だちがたくさん居る。大変なこともあるけど、先生や、たくさんの友だちは、私が困っている時、すぐに助けてくれている。

たくさんの人が私のこと支えてくれる。

赤はな先生と同じように…。

病院の先生方、学校のやさしくて楽しい先生や大好きな友だち、応えんしてくれる家族など、私にとって、みんな大切な人たちだ。

「赤はな先生に会いたい！」　副島　賢和・著　金の星社

教育出版賞

あの日を忘れないために

藤女子中学校　三年　高輪　柚希

現代の人々は、平和な社会に生きている実感があるだろうか。私は今、平和であるということが当たり前であるため、改めて感じることは少ないように思う。

この物語は、昭和八年十二月二十二日の出来事から始まっている。祖母が昭和八年十二月九日生まれということもあり、私は祖母の人生と照らし合わせながら読み進めていった。この本は何気ない日常を描いているが、本に度々記される年月と日付けを見ると、元気だった祖母から聞いていた戦争の話と重なって、この本の時代に引き込まれていった。

この本の主人公のすずは、空襲で被害を受けた身になりながらも日常を懸命に生き抜いた。故郷の広島に原爆が落とされた時はどれほど辛い気持ちで空をながめていたことだろう。もし自分がその立場であったら耐えられなかったと思う。

そして、この本を読み進めながら思い出した。以前、祖母から戦時下の話を聞いたことだ。子供の頃、Ｂ29が自分の真上を通過するのを見て、電灯に布を被せ、身をひそめながら恐ろしい思いをして空を見つめていた話。戦後食糧不足で、お米の量を増やすため、ふかしたじゃがいもと一緒に混ぜたご飯を食べて、それがほぼじゃがいもの味のご飯で、そのにおいが嫌いだった話。祖母は色々な戦争の話を私にしてくれた。そんな祖母も、今では話すこともできず、寝たきりの状態だ。今、私も七十五年前のあの日あの時と同じ空を見ていると思うと、とても感慨深い。

この本を読み終えた時、私の気持ちは今までの読書後とは少し違った。読書を通じて感動することは幾度となくあったが、この本を読みながら涙はどれほど流れただろう。胸の奥深いところから徐々に込みあげてくる思い、言葉では表現できない感情があった。

戦争と言うと私は真っ先に祖父の兄のことが思われる。太平洋戦争末期一九四五年三月二十六日から沖縄戦が始まり、私の祖父の兄はそこで戦死した。遺骨は発見されず、沖縄の石だけが箱に詰められ、戦場から戻ってきた。現在、お寺に預けられているその箱は、まだ二十歳だったおじさんの名前が書かれた白い布で包まれている。祖母の部屋には戦場に向かう直前の家族写真がある。国旗を手にして軍服を着ている写真だ。その古びた白黒の年季の入った写真から様々なことが感じられる。曽祖母の、どこか不安げな瞳。曽祖父の、「お国のために頑張ってきなさい。」というかのような力強い気持ちが伝わる凛とした瞳。戦場に我が子を送り出す両親の気持ちが、どんなに苦しく辛いものか、痛いほど伝わってくる。命日は本当に命を落とした日なのかどうかもわからない『慰霊の日』の六月二十三日とされている。

戦争で犠牲になった人々はどんなに無念だったか。生き残ることができていたら、戦後どんなにか豊かな人生を送っていたかと思うと胸が痛む。

戦後七十五年が経ち、戦争を体験した世代は、どんどん年老いていっている。戦争の記憶は薄れ、語れない人もたくさんいる。戦争を体験した人々からお話を伺ったりして、戦争を知らない私たち平成生まれの者が後世に語り継ぐための橋渡しをしなければならない。

戦争の悲惨さ、それでも淡々と生きていく強さ。戦時中、様々な工夫を凝らした生活。友や家族との人間模様をこの本から感じ取れた。戦争が世の中の空気を変えていったことと、今、新型コロナウイルスの蔓延で世界の状況が変わってしまったことが、少し類似しているようにも感じた。自粛生活が続いたり、不安になることもあるが、本来日本人が持っている心の強さで、人々が共に困難な状況を乗り越えることができるのではないかと感じた。

戦争とは、ただの暴力に過ぎなかったもので、何年経っても人々の記憶から消えてはいけないことだと思う。あの悲惨な戦争の苦しみを、思い出したくない人もたくさんいるだろう。だが、このような歴史があって、現代の私たちの尊い命があると思うと、深く感じるものがある。私たち若者は、戦争から決して目を背けてはいけない。戦争を少しでも知ってみようという気持ちを人々が分かち合うと平和な世界を造ることができるかもしれない。

この本で、今まで私の知らなかった、戦前や目の覆いたくなるような戦時中の事柄を知り、今生きている平和な世の中の有難みを感じた。

今年、七十五年目の終戦の日を迎えた。もう二度と国と国との戦いは起こしてはいけない。この思いは、戦争を体験した方々や被爆した方々が口をそろえて言う言葉である。この人々の強い意志と平和の大切さを伝えていくのが、これからの世の中を造っていく私たちの役割であり、使命だと思っている。

「この世界の片隅に」

こうの史代・著、蒔田陽平・ノベライズ　双葉社ジュニア文庫

北海教育評論社賞

ポリぶくろ、一まい、ひろって

伏見小学校　四年　前田　海音

ロウソクの灯りだけで編むなんて絶対無理。初めてかぎ針でくさり編みをした私の手と目は悲鳴をあげた。病気で不自由な右手はまるで思うように動いてくれない。笑いものにされても財布を編んだアイサト達は、「わたしたち、いいことやってるんだもの」という信念だけでその活動を続けたのだろうか。私は指の痛みにうんざりしながら、アイサト達のものづくりへ向き合う動機に想いをはせた。

ヤシの葉で編んだカゴを頭に乗せ荷物を運ぶたびに首の痛みに苦しんでいたアイサト達にとって、ポリ袋は苦痛から自分達を解放してくれた手軽で便利な道具であった。破れたポリ袋は「みんなそうしてる」と地面に捨てられた。おそらくアイサト達には衛生的にゴミを収集、処理するという文化が存在しなかったのだろう。だとしたらポイ捨てを誰も責められない。しかし捨てられたポリ袋は村を汚染し始める。家畜のヤギがポリ袋を食べて亡くなった事に肩を落とす祖母の姿を見て「自分たちの手で何とかしよう。」と決意し、自らの手でゴミの山からポリ袋を一枚拾う。「みんなやってる」事を自らの意思でやめたアイサトは、目の前の問題に興味がある人にもない人にも伝わる方法を模索し、行動した。

「物を買う」という行動は「お金による投票」だ。二〇一五年の国連サミットで掲げられた「SDGS」という目標では「責任ある消費」が提唱されている。アイサト達は汚れたポリ袋を洗い、ひも状にしたものを材料として財布作りを始めた。ポリ袋の資源化は低コストで済む。かぎ針で編まれた財布は軽くて丈夫だ。元々の形状や特徴を生かしてゴミに命を吹き込み、宝物に変える再利用を「アップサイクル」と呼ぶ。初めて財布が売れた場面のアイサトは目を見開き驚き顔だ。アイサト自身もこの挑戦に半信半疑だったのだろう。しかしアイサトは財布が売れたことで消費が社会を変える事を確信した。自分達の商品が売れて収入となり、その収入で人々や家畜が健康を取り戻せた事でアイサト達には役割を持つ女性としての自信が生まれた。自信は自立へのかけ橋だ。自立した仲間が助けあい活動する事は社会を支える力となる。アイサト達の活動は世界的に評価されて、日本人の私達が本という形で知るほどに成功した。

人が手を動かして何かを創造する時、試行錯誤するからこそ楽しさを実感する。若いから無理。女性だから無理。そんな言葉がアイサトを奮い立たせた。ホウキの柄を削ったかぎ針と元ポリ袋のひもで創造する事を諦めず、かつてポリ袋に感じた魅力を財布として再生させた。物があふれる日本で私達は消費にばかり注目して、創作する事には鈍感だ。「出来ない。」という諦めの姿勢を少し変えるだけで私達の世界の可能性は広がる。かぎ針編みを私はまだ楽しめない。でもその先にあるはずの新しい世界を味わいたいから、諦めない。私は再びかぎ針を持ち、痛む指先を見ては呟く。「アイサト、あなたもそうだった？」

「ポリぶくろ、１枚、すてた」

作　ミランダ・ポール　絵　エリザベス・ズーノン

さ・え・ら書房

図書館ネットワークサービス賞

生きること

藤女子中学校　一年　金一　裕

「生きていく道には、いつも曲がり角があるものなのです。」

この言葉を読んだとき、私は「生きる」ことについての考え方が変わった。そして、言葉が自然と私の中に入ってくる気がした。その後、人生において未知があることのおもしろさを実感した。

しかし、私は「生きる」ということを具体的に説明することができない。生きるとはどういうことなのだろうか。

また、アンは想像の素晴らしさを感じている。想像は、生きることとどのように関係しているのだろうか。

私はまず、生きるとはどういうことかを考えてみた。最初私は、感情をもち、人と関わり、自分の生き方を選んでいくことが生きるということだと思った。しかし、アンの様子を思い出してみると、何かが足りない気がした。アンが生きるということについて教えてくれている気もした。そして、足りない「何か」は自分らしさだと気がついた。アンの周りの人々との関わり方、想像などの全てがアンらしさであり、アンが生きることである、と。本文中に「全身『活気と火の露』のようなアンは、人生の喜びも苦しみも、人の三倍も強く感じるのでした。」とあるように、マシュウの死をとても悲しむ姿などの「感性」、「たとえ花でも、ちゃんと名前のついているほうが、ずっと親しい感じがすると思うの。」というように全てのものに対する「愛と想像力」がアンらしさだと思う。つまり、私の考える「生きる」ことは、自分らしさを大切にすることだといえるだろう。また、私は自分らしさがあるからこそ、一人ひとり違うからこそ成り立つのが、おもしろい世の中なのだと思う。みんなが「周りと違ったっていいんだ。」と思えるように、自分に自信を持って生きることができるように、世の中が差別なく、個性を尊重しあえるように変わっていってほしいと改めて感じた。

次に、想像について考えてみた。想像とは、自分の中の楽しさを感じるためだけに使うものなのだろうか。

私は、想像は自分の楽しさを感じるためだけにあるのではないと思う。もっと深く、もっと大きく生きることと関わっているように思えるのだ。

例として、生きていく道にある分かれ道が挙げられると思う。皆、決める前に、選んだ後を想像する。これは意識的なものではない。つまり、想像は普段からしている何気ないことなのだ。また、想像が普段の生活と深く関係しているといえる。そして、本の中では、アンがレドモンドに行かないことを決めた場面だ。レドモンドに行かないのを夢を諦めさせてしまうと心配するマリラに「今までどおり夢はあるわ。ただ夢のあり方が変わったのよ。」と答える。ここでアンの想像力が生かされ、行かないという決断が後ろ向きではなく前向きな決断となった。

しかし、想像を決断のためだけに使っていては、楽しくない。決断するときにでも使うことができる想像だが、自分が楽しむためにも使うことができる。アンのようにそのもののイメージからものに名前をつけるのもいいかもしれない。想像をすると、世の中が楽しく感じられるようになる。リラックスのための想像も必要なのだろう。

このように、生きることと想像は深く関係しているようだ。私は生きているからこそ想像が存在するような気がしている。

また、『赤毛のアン』を読んで、私は自分のこれからの生き方について考えてみたいと思った。

私はアンをお手本にしたいと思う。想像力を使って、人生をより、楽しくて有意義なものにしたいと思えた。そして、私は想像力を自分のために、というよりも、周りの人のために使いたいと思った。アンは周りの人を魅了し、楽しい気持ちにさせるような想像力をもっている。私はアンの想像力に秘められた優しさがあると感じた。私もアンのように笑顔が増えるような想像力を使いたい。周りの人のために想像力を使っていったら、少しずつ相手の気持ちを考えられるようになって、いやな思いをする人が一人でも減るかもしれない。人の気持ちをよく考えるという部分に特に想像力を使っていきたい。

そして、「生きる」ということが個性を尊重しあって、自分らしさを大切にすることだとするならば、私は相手のよいところをはやくみつけることができるようにしていきたいと思う。私自身もアンのように自分らしさをかくさずに、堂々としていたい。

想像力が生活と深く関係していけば、もっと、みんなが楽しく過ごすことのできる世の中になるのではないか。アンの住むような楽しい世の中になるのではないか。私は、そうなってくれることを願って、想像力を働かせていきたいと思う。

「赤毛のアン」Ｌ・Ｍ・モンゴメリ・作　村岡花子・訳　講談社

図書館ネットワークサービス賞

平和　―大塚晟夫さんの手記を読んで―

札幌光星高等学校　一年　棚橋　歩実

『はっきり言うが俺は好きで死ぬんじゃない。何の心に残る所なく死ぬんじゃない。』

太平洋戦争末期、爆弾を抱えた戦闘機に乗って敵軍の艦船に体当たり攻撃した特別攻撃隊。この文章は、特攻隊員として二十三歳で戦死したある男性が、家族を思いながら書いた手記の一部である。男性の名前は「大塚晟夫」。彼はこの後も国や家族の将来について心配する内容の文章を書いている。

以前から日本の歴史、特に太平洋戦争あたりの歴史に少し興味があった私は、ネットニュースやテレビの番組表に「戦争」の文字が見える度に注目してみるということを、何度か繰り返していた。そして、その中でもひときわ私の心をギュッとしめつける共通の内容を見つけたのだ。それが「特攻」だった。

「特攻へ向かった隊員たちは、本心では何を思って亡くなっていったのだろう。」

そう思った私は夢中で過去のテレビ番組の録画や資料を探し、一つの書籍にたどり着いた。戦争で亡くなった学徒兵たちの手記をまとめた『きけ　わだつみのこえ』である。冒頭の文章を書いた大塚晟夫の手記もこの書籍に記載されていた。彼が書いた言葉はどれもまっすぐで、またまた私の心に深く、深く突き刺さった。

『皆が俺の心を察して今まで通り、明朗に仲良く生活してくれたならば俺はどんなに嬉しいだろう。』

これは自らの死を知った家族のその先について、自身の希望を書いた一文である。彼は出撃の直前まで家族に向けたこの手記を書いていた。父、母、姉と妹たち、個々の体を案じる言葉も添えられている。また、彼以外にも多くの学徒兵たちが、自分が戦死した後の家族を心配する内容の文章を書いていた。日々戦局が悪化する中で、遠い故郷に残してきた家族のことがどれだけ心配だったか。今の私には到底想像もできないような辛さだっただろう。自身も命の危険と隣り合わせの状況であったのに家族を想うことができることから、彼らと家族の強い繋がりがうかがえる。それは、現代の家族の繋がりの強さとは少し違った強さなのかもしれない。

出撃の日の彼の心情がそのまま記された文がある。

『どうも死ぬような気がしない。ちょっと旅行に行くような軽い気だ。鏡を見たって死相などどこにも表れていない。』

当たり前だ。と私は思った。彼らは何の前触れもなく突然死の宣告を受け、待ったなしで散っていったのだから。それについて実感を伴わないのも当たり前だ、そう思った。しかし、このように実際体験した人の言葉を目にすると、言葉の重みが違う、そう感じた。彼らはもしかすると、飛行機に乗り込んでもこんな心情だったのではないか。飛び立った後もこう思っていた人もいたのではないだろうか。けれども、彼らは一度飛び立つと帰ってくることは許されていなかった。実感する頃には「死」という選択肢しか残されていなかった人もいたのではないか。そう考えると、「特攻」というものの残酷さを身にしみて痛感する。胸が張り裂けそうになるとはこの事を言うのだと改めて理解した。

大塚の手記は、出撃四時間前で終わっていた。

『皆元気でゆこう。大東亜戦争の必勝を信じ、君たちの多幸を祈り、今までの不孝を御詫びし、さて俺はニッコリ笑って出撃する。』

出撃が四時間後に迫ったその時、彼の脳裏に浮かんだのはやはり家族の姿だった。もう二度と会うことの叶わない家族を、きっと彼は最後の最後まで大切に想っていたのだろう。また、彼は日本の勝利を信じていた。それは日本の未来に希望を持っていたということと同義であると私は考えた。

「戦争に勝てば、日本には明るい未来が待っている」

そう考えていたのではないか、と。確かにその考え方は戦時中の日本ではごく普通のものであったし、その「明るい未来」を実現させるために多くの日本人が自らの命をかけて戦った。

では、今の日本はどうだろう。彼らが望んだであろう「明るい未来」をつくることができたのだろうか。太平洋戦争終結後、日本は著しい発展を遂げてきた。度重なる空襲で壊滅状態になった大都市も今ではすっかり復興し、多くの人々が行き交うようになった。

「昔戦争をやっていたなんて嘘みたい。」

そう思うこともあるかもしれない。しかし私たちは忘れてはいけない。今の平和は、僅か七十数年前に命をかけて戦った多くの日本人の犠牲の上にあり、当たり前ではないのだと。

大塚晟夫は家族へ向けてこう書いた。

『俺は君たちの胸の中で生きている。』

この手記を読んだ今、彼の希望の一部は今度は私たち若い世代の中に生きているだろう。私たちがこの平和を保つ番。そう思うのだ。

「きけ　わだつみのこえ―日本戦没学生の手記」
日本戦没学生記念会・編　岩波書店

光村図書出版賞

ぼくの５分

札幌市立小野幌小学校　一年　林　煌介

この絵本には、ぼくみたいな子が出てきてすきだなと思った。かみがたや、じたばたしているところ、「まてなーい」ってのびてみたりするのがにている。

ぼくの長い５分とみじかい５分も考えてみることにした。

みじかくかんじる５分の中でも、お気に入りは２つある。ぬいぐるみのコニュムをむぎゅーっとするときだ。

もう一つは、いもうとのあんりがねている時こっそりやるママとのボードゲーム。あんりとおふざけタイムもめっちゃたのしいけど、このじかんはあっというまだ。とくにチェスとかあんりにみつかったら、バラバラにされる。だからすこしでも長くできるように、しずかにやるのがたのしい。

けれど、さいきんあんりが家で昼ねをしないのでお気に入りのボードゲームができない。そこで、長くかんじるつまらない５分をくふうできないか考えてみた。

シャワーを５分は大きらい。ぼくはおゆにもぐったり、水ふうせんをしてゆっくり入りたい。でも、この前すぐにシャワーをこうたいしたら、ママとあんりがおふろ中にパパとカードゲームがいっぱいできた。これは、すごいはっけんだった。

それと、ママといっしょにゆうはんのかたづけがぼくのしごと。この５分は長いしあんまりやりたくない。でも、ママときょうりょくしたらすぐにおわった。しかも、ねる前に家ぞくみんなであそべる時間がつくれることもはっけんした。

ぼくは、この絵本に出あえて、ぼくのお気に入りの５分を考えてみたら、家ぞくとたのしいことをする時間がとくべつだと気がつけた。そしていろんなあんを考えてみたら、とくべつな時間をもっとふやせるとも気がつくことができた。

ぼくは、もっとたくさん家ぞくとのたのしい時間をつくるあんを考えていきたい。

「ながーい５ふん、みじかい５ふん」

作　リズ・ガートン・スキャンロン　オードリー・ヴァーニック

絵　オリヴィエ・タレック

光村教育図書

佳　作

◇小学校の部　低学年

課題	はじめの一歩	札幌市立ひばりが丘小学校	１年	山本　新大
課題	五分のしあわせ	札幌市立有明小学校	１年	大内　隆聖
自由	しょうがっこう１ねんせいになって	札幌市立桑園小学校	１年	坪松　健太郎
課題	「ながーい５ふんみじかい５ふん」をよんで	札幌市立白楊小学校	１年	小柳津　朋哉
自由	いろいろなかぞくのほん	札幌市立美香保小学校	２年	田中　絢萌
自由	おかあさんメガネはすごい	札幌市立開成小学校	２年	小野　芽衣子
指定	ゆうきあるサンへ	札幌市立新陽小学校	２年	佐々木　天夢
指定	あかちゃんをうむこと	札幌市立桑園小学校	２年	高橋　大和

◇小学校の部　中学年

自由	「ペロのおしごと」を読んで	札幌市立北野台小学校	３年	井上　結愛
自由	笑顔が大好き！	札幌市立大谷地小学校	３年	工藤　大斗紀
課題	猫と暮らせば	札幌市立西岡北小学校	３年	毛利　優月
課題	わたしにもできることがある	札幌市立発寒南小学校	３年	小島　愛奈
課題	青いあいつが教えてくれること	札幌市立日新小学校	３年	高見　羽琉
指定	「手と手をぎゅっとにぎったら」を読んで	札幌市立日新小学校	３年	益井　桜

◇小学校の部　中学年

自由	本当のお別れ	札幌市立澄川西小学校	４年	吉田　咲穂
自由	「動物と話せる少女リリアーネ」を読んで	札幌市立澄川西小学校	４年	久保　ののか
課題	「ありがとう」は魔法の言葉	札幌市立厚別北小学校	４年	鈴木　樓太
指定	ンジャウ村のポリぶくろ～ぼくのできること	札幌市立北郷小学校	４年	鈴木　涼雅

◇小学校の部　高学年

自由	杉原千畝と杉原弘樹	札幌市立もみじの森小学校	５年	竹田　雅
課題	今、私にできること	札幌市立厚別北小学校	５年	佐々木　碧
課題	ヒロシマ消えたかぞくを読んで	札幌市立日新小学校	５年	小林　楽央
課題	珊瑚と一緒に	札幌市立桑園小学校	５年	元村　有
課題	誰だって、人に頼って生きている	札幌市立桑園小学校	５年	須田　健心
課題	明るい未来を願う	札幌市立北野台小学校	５年	大野　佑真
指定	僕でなければできない仕事	札幌市立山の手南小学校	５年	長堀　巧
指定	世界でたった一つの自転車	教育大学附属札幌小学校	６年	加藤　優奈

◇中学校の部

自由	自分らしさとは	藤女子中学校	１年	松岡　あお衣
自由	『いつも心の中に』を読んで	藤女子中学校	１年	青名畑　希良
課題	「平和のバトン」を次の世代へ	教育大学附属札幌中学校	１年	渡辺　結
課題	平和のバトンをつなぐ時	藤女子中学校	１年	森　遥彩
指定	出会いは人を変える	札幌市立清田中学校	１年	東地　心菜
自由	だれもが愛される社会を築くために	藤女子中学校	２年	加納　侑和
自由	『生物学者』を読んで	藤女子中学校	２年	中村　天音
自由	森	札幌市立向陵中学校	２年	西村　絢
自由	ボトルネックとは何か	教育大学附属札幌中学校	２年	和田　未来
自由	カラフル	札幌市立あいの里東中学校	３年	進藤　穂香

◇高等学校の部

自由	いじめから何も良いことは生まれない	札幌聖心女子学院高等学校	１年	菅原　花未
自由	「魔法の振り子」を読んで	札幌市立札幌啓北商業高校	２年	西岡　芽生

優　良　賞

◇小学校の部　低学年

自由	わたしの５ふん	札幌市立新川中央小学校	１年	山田　うみ
課題	みんなわらった	札幌市立苗穂小学校	１年	土肥　樹生
課題	ぼくのみじかい５ふん　ながーい５ふん	札幌市立澄川南小学校	２年	皆川　広登

◇小学校の部　中学年

自由	二日月を詠んで	札幌市立伏見小学校	４年	前田　海音
課題	青いあいつがやってきた！？	札幌市立宮の森小学校	４年	大野　凛
指定	「ポリふくろ、１まい、すてた」を読んで	札幌市立日新小学校	４年	齋藤　楓子

◇小学校の部　高学年

自由	ピアノとは、音楽とは	札幌市立厚別西小学校	５年	坂本　温音
自由	メロディの心にあったもの	札幌市立福住小学校	５年	岩本　亜澄
課題	ヒロシマ　消えたかぞく	札幌市立日新小学校	６年	坪　瑠樹

◇中学校の部

自由	家族の第一歩	藤女子中学校	１年	伊藤　彩葉
自由	永遠の０	札幌市立向陵中学校	１年	加藤　志衣菜
自由	素直と謙虚と感謝	藤女子中学校	１年	櫛橋　りな
自由	本に求める「モノ」。本の存在とは何か	藤女子中学校	２年	菅原　美空
自由	悪をも変える愛の力	藤女子中学校	２年	野崎　愛加利
自由	あと少し、もう少し	札幌市立向陵中学校	２年	齋藤　亜唯
課題	人と人との出会い	藤女子中学校	２年	高橋　美有
自由	今の日本に思うこと	札幌市立北都中学校	３年	澤見　玲亜

◇高等学校の部

課題	フィクションのようなノンフィクション	北海道札幌西陵高等学校	１年	藤木　萌乃
自由	朝が来るまで	札幌聖心女子学院高等学校	３年	児玉　優子

第６６回　札幌市読書感想文コンクール
入　賞　者　一　覧

令和２年度

札幌市長賞	札幌聖心女子学院高等学校	１年	目良　茉莉香
	自由	「車輪の下」を読んで	
札幌市議会議長賞	札幌市立西宮の沢小学校	６年	板倉　暖佳
	課題	新しい自分へ	
札幌市教育長賞	藤女子中学校	２年	長谷　涼那
	自由	人と人との繋がり	
札幌市学校図書館協議会会長賞１	札幌市立清田緑小学校	４年	東地　賢頼
	自由	努力を続ける自分になる	
札幌市学校図書館協議会会長賞２	北嶺中学校	１年	前田　海杜
	自由	二日月が照らしたのは	
札幌市学校図書館協議会会長賞３	札幌光星高等学校	２年	土岐　希美
	自由	平和は怖い	
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞１	札幌市立厚別北小学校	２年	佐々木　正明
	課題	わすれない名前	
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞２	藤女子中学校	２年	姉崎　優希
	自由	勇気と友達、この２つがあれば	
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞３	札幌光星高等学校	２年	加藤　萌香
	自由	「私達」の罪	
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞	札幌啓成高等学校	２年	武石　琉花
	自由	世界のはての少年がくれた希望	
光陽社賞	藤女子中学校	１年	横窪　悠梨椰
	自由	しっぽをなくしたイルカを読んで	
キハラ賞	札幌市立美香保小学校	５年	田中　柚妃
	自由	赤はな先生に会いたい！	
教育出版賞	藤女子中学校	３年	高輪　柚希
	自由	あの日を忘れないために	
北海教育評論社賞	札幌市立伏見小学校	４年	前田　海音
	課題	ポリぶくろ、一まい、ひろって	
図書館ネットワークサービス賞１	藤女子中学校	１年	金一　裕
	自由	生きること	
図書館ネットワークサービス賞２	札幌光星高等学校	１年	棚橋　歩実
	自由	平和―大塚晟夫さんの手記を読んで―	
光村図書出版賞	札幌市立小野幌小学校	１年	林　煌介
	課題	ぼくの５分	

学校賞

毎日新聞社賞　藤女子中学校